

重さ 1 の保型形式についてのいくつかの話題

神戸大理 平松豊一 (Toyokazu Hiramatsu)

§ 1. $f(x)$ を *monic* で既約な整係数多項式とし, p を素数とする. $f(x)$ の *reduction modulo p* を $f_p(x)$ とかく. $f_p(x)$ は p 個の元からなる体 F_p に係数をもつ多項式である. $f_p(x)$ が F_p 内で相異なる 1 次式の積に分解するような素数 p の集合を $Spl(f)$ とかき, $Spl(f)$ にやくなる素数 p を決定する *rule* を, 多項式 $f(x)$ に関する *higher reciprocity law* と呼ぶ. 例えば, 平方剰余の相互法則は次のような *rule* を意味する: 奇素数 q に対し, $Spl(x^2 - q)$ は $q \equiv 1 \pmod{4}$ なら \pmod{q} で, $q \equiv 3 \pmod{4}$ なら $\pmod{4q}$ で決まる.

例. n 位円分多項式 $\Phi_n(x)$ に対し,

$$Spl(\Phi_n) = \{ p: \text{素数} \mid p \equiv 1 \pmod{n} \}.$$

はじめの $f(x)$ の有理数体 \mathbb{Q} 上の最小分解体を K とし, そのガロア群を G とする. G がアーベル群のとき, $f(x)$ をアーベル多項式と云う. 次の定理は \mathbb{Q} 上の類体論(終結定理)が

教える所である：

定理. $Spl(f)$ が $f(x)$ のみによって決まる法に関する合同条件のみで決まるための必要十分条件は $f(x)$ がアーベル多項式なことである.

それでは, $f(x)$ のガロア群 G が非アーベルなとき,

$$Spl(f) = \{ p \mid \text{合同条件} + ? \}.$$

以下では, ある種の非アーベル多項式に対し上の「?’の部分」を $\Gamma_0(N)$ -型の重さ 1 の cusp forms の Fourier 係数で記述することについてもふれる.

例 1. $f(x) = x^3 - 2$. $K = \mathbb{Q}(\sqrt{-3}, \sqrt[3]{2})$, $G = S_3$.

$$\begin{aligned} Spl(x^3 - 2) &= \{ p \mid p \equiv 1 \pmod{3}, \left(\frac{2}{\pi}\right)_3 = 1 \text{ for } p = \pi\bar{\pi} \text{ in } \mathbb{Q}(\sqrt{-3}) \} \\ &= \{ p \mid p \equiv 1 \pmod{3}, a(p) = 2 \}. \end{aligned}$$

ここで, $\eta(\tau)$ を Dedekind の η 関数とするとき,

$$\eta(6\tau)\eta(18\tau) = \sum_{n=1}^{\infty} a(n) q^n, \quad q = e^{2\pi i \tau}.$$

$\eta(6\tau)\eta(18\tau)$ は, $\Gamma_0(2^2 \cdot 3^3)$ に関する重さ 1 の cusp form と与える. 更に, これらと楕円曲線 $y^2 = 4x^3 + 1$ との関連については, Kaike [16] を参照して下さい.

例 2 (Mareno [13]). $f(x) = x^4 - 2x^2 + 2$. $K = \mathbb{Q}(\sqrt{-2}, \sqrt{1+\sqrt{2}})$, $G = D_4$.

$$\#\{x \in \mathbb{F}_p \mid f(x) = 0\} = 1 + \left(\frac{-1}{p}\right) + a(p);$$

$$Spl(f) = \{ p \mid p \equiv 1 \pmod{8}, a(p) = 2 \}.$$

前者を $f(\tau)$ に関する合同関係式と云い、後者はそれより従う。

ここで、

$$\eta(8\tau)\eta(16\tau) = \sum_{n=1}^{\infty} a(n)q^n$$

で、これは $\Gamma_0(2^7)$ に関する重さ 1 の cusp form である。

§2. 上記例 2 の $a(n)$ を求めるには、Jacobi の 3 重積公式が使われる (Jacobi) : それによつて、

$$\begin{aligned} \eta(8\tau)\eta(16\tau) &= \sum_{a,b \in \mathbb{Z}} (-1)^b q^{(4a+1)^2 + 8b^2} \\ &= \sum_{\alpha, \beta \in \mathbb{Z}} (-1)^{\alpha+\beta} q^{(4\alpha+1)^2 + 16\beta^2} \end{aligned}$$

これより、次の等式を得る (Smith) : $p \equiv 1 \pmod{8}$ に対し、

$$a(p) = 2 \varepsilon (-1)^{\frac{p-1}{8}} = \pm 2.$$

ここで、 ε は ± 1 で、 $\equiv 2^{\frac{p-1}{4}} \pmod{p}$. 上式の符号を決める所が非アーベル的な所である。一方、Kac - Peterson ([14], [15]) は、

$$(1) \quad \eta(8\tau)\eta(16\tau) = \sum_{\substack{m, n \in \mathbb{Z} \\ n \geq 3|m|}} (-1)^n q^{(2n+1)^2 - 32m^2}$$

なる新しい等式を得た。これら 3 つの恒等式の数論的背景は次の如くである (Barrucand - Cohn [3]). $p \geq 5, p \equiv 1 \pmod{8}$ なる素数、虚 2 次体 $\mathbb{Q}(\sqrt{p})$ の類数を h とする。そして、

$$p = (4a+1)^2 + 8b^2 = (4\alpha+1)^2 + 16\beta^2 = (2n+1)^2 - 32m^2$$

とするとき、次の同値関係が得られる：

$$b \equiv 0 \pmod{2} \iff \alpha + \beta \equiv 0 \pmod{2} \iff n \equiv 0 \pmod{2} \\ \iff \left(\frac{-4}{p}\right)_8 = 1 \iff h \equiv 0 \pmod{8}.$$

この同値関係の一般化を表現しているのが上の3つの恒等式に他ならない。もう一つ Gauss の例を与えよう。 $p \equiv 1 \pmod{8}$ なる素数 p を、

$$p = (4a+1)^2 + 8b^2 = (4\alpha+1)^2 + 16\beta^2 = x^2 - 32y^2$$

と表したとき、次の同値関係が成立する：

$$a \equiv 0 \pmod{2} \iff \beta \equiv 0 \pmod{2} \iff \left(\frac{-2}{x}\right) = 1 \\ \iff \left(\frac{2}{p}\right)_4 = 1 \iff h(\sqrt{-2p}) \equiv 0 \pmod{8}.$$

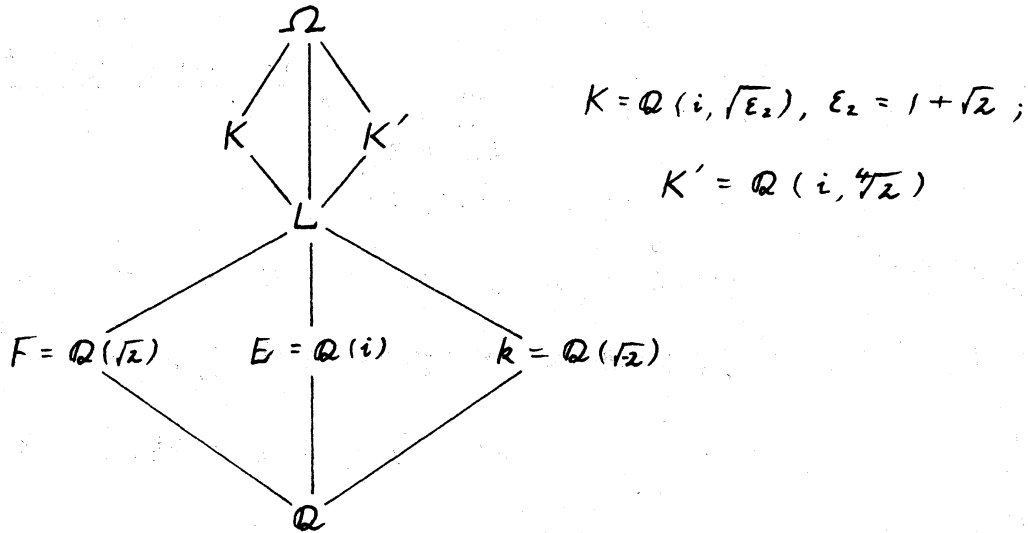
ここで、 $h(\sqrt{-2p})$ は虚2次体 $\mathbb{Q}(\sqrt{-2p})$ の類数を表す。そして、この同値性の一般化を与えているのが、次の3つの恒等式である：

$$\frac{1}{2} \nu_0(32\tau) \nu_2(8\tau) = \sum_{a,b \in \mathbb{Z}} (-1)^a q^{(4a+1)^2 + 8b^2} \\ = \sum_{\alpha,\beta \in \mathbb{Z}} (-1)^\beta q^{(4\alpha+1)^2 + 16\beta^2} \\ = \sum_{x,y \in \mathbb{Z}} \left(\frac{-2}{x}\right)_8 q^{x^2 - 32y^2} \\ x > 6|y|$$

ここで、 ν_0, ν_2 はそれぞれ、

$$\nu_0(\tau) = \sum_{m \in \mathbb{Z}} (-1)^m q^{\frac{m^2}{2}}, \\ \nu_2(\tau) = \sum_{\substack{m \in \mathbb{Z} \\ m \equiv 1 \pmod{2}}} q^{\frac{m^2}{8}}.$$

上の二つの例は、次のように統一的に扱える：



上図で、 Ω は E 上 $\text{mod } 8$ 、 F 上 $\text{mod } 4\sqrt{2} (\infty_1)(\infty_2)$ 、 k 上 $\text{mod } 4\sqrt{2}$ の極大な ray class field である。 $p \equiv 1 \pmod{4}$ なる素数 p に対し、

$$p: L \text{ で完全分解} \iff \left(\frac{-1}{p}\right) = \left(\frac{-2}{p}\right) = 1 \iff p \equiv 1 \pmod{8}$$

$$\iff p = (4a+1)^2 + 8b^2 \quad \text{via } k$$

$$\iff p = (4\alpha+1)^2 + 16\beta^2 \quad \text{via } E$$

$$\iff p = (2n+1)^2 - 32m^2 \quad \text{via } F.$$

そしてこのもとで、

$$\left(\frac{-4}{p}\right)_8 = \left(\frac{\varepsilon_2}{p}\right) = 1 \iff p: K \text{ で完全分解} \iff \text{Barrucand-Cohn};$$

$$\left(\frac{2}{p}\right)_4 = 1 \iff p: K' \text{ で完全分解} \iff \text{Gauss}.$$

このように扱える背景には、新谷氏の仕事[18]が深くかかわる。一方、Kac-Peterson は [15] で、次のような新しい恒等式も与えた。

$$\text{例 3. } \eta^2(12\tau) = \sum_{\substack{k, l \in \mathbb{Z} \\ k \geq 2, l \geq 1}} (-1)^{k+l} q^{\frac{3(2k+1)^2 - (6l+1)^2}{2}}$$

$$\text{例 4. } \eta(4\tau)\eta(20\tau) = \sum_{\substack{k, l \in \mathbb{Z} \\ 2k \geq l \geq 0}} (-1)^k q^{\frac{5(2k+1)^2 - (2l+1)^2}{4}}$$

本講究録でも，例 2 の (1) 式，例 3，例 4 について，それらのもつ Lie 環論的側面と数論的側面の両面が扱われている。いづれにしても，以上のことを一般化して，

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{重さ 1 の cusp forms の} \\ \text{いくつかのテータでの表現} \end{array} \right\} \Leftrightarrow \text{剰余性} \Leftrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{2 次体の類数} \\ \text{の整除性} \end{array} \right\}$$

なる同値関係を確立することが望ましいように思われる。

§ 3. さて，話を少しかえて，先ほどの例 2 との関連で，虚 2 次体 $\mathbb{Q}(\sqrt{2})$ に対応する Dirichlet 指標 χ_{-2} をもつ $\Gamma_0(2^?)$ に関する重さ 1 の normalized newform は $\eta(8\tau)\eta(16\tau)$ だけなのであることが示されている (Tunnell [19], Th. 1)。
それでは一般に， Γ を \mathbb{C} 上 1 種 Fuchs 群とし， ε をその odd character とする。 Γ に関する重さ 1 の ε 付きの cusp forms の作る空間を $S_1(\Gamma, \varepsilon)$ とし，

$$d_1 = \dim S_1(\Gamma, \varepsilon)$$

と置く。この d_1 を求めることを問題にする。 $S_1(\Gamma, \varepsilon)$ に対応

する divisor D_0 が special なため, Riemann-Roch の定理がこの場合 effective に働かない. 従って, なんらかの別の方法をとらなければならないが, それでも重さ > 1 のときとは異なり, Γ の基本的性質 (Γ の signature) のみによる閉じた形での formula は望みえないと云うのが大方の意見であります.

(I) Γ : uniform lattice のとき.

Γ を $\begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$, $\varepsilon = \text{id.}$ とする. まず, $d_1 \pmod 2$ を考える. Γ から決まるコンパクトな Riemann 面を \mathcal{R} とし,

$$S(\mathcal{R}) = \{ L : \text{holo. line bundles on } \mathcal{R} \mid L^2 \cong K \}$$

とおく. ここで, K は canonical line bundle とする.

$S(\mathcal{R})$ の元は theta-characteristic と呼ばれる (Atiyah [2]).

$\deg D_0 = g - 1$ (g : \mathcal{R} の genus) だから, D_0 に対応する line bundle を L_0 とするとき, $L_0 \in S(\mathcal{R})$ である. $S(\mathcal{R}) \ni L$ に対し, L の holomorphic sections の空間を $\Gamma(L)$ とするとき,

$$d_1 = \dim \Gamma(L_0).$$

そして, $\dim \Gamma(L) \pmod 2$ は \mathcal{R} , L の deformations によって stable である (Riemann). この位相的不変量を Atiyah invariant と云う. Γ の基本的な位相的性質のみから $d_1 \pmod 2$ が決まるかどうかが一つの問題である (Hiramatsu-Mimura [10]).

次に, d_2 そのものを問題にする. 結果だけを述べれば, Selberg's trace formula により, 次のような formula を得る:

$$(2) \quad d_1 = \frac{1}{2} \sum_{\{M\}} \frac{1}{[\Gamma(M):1]} \frac{-\zeta}{(\zeta^2 - 1)^2} + \dim \mathcal{H}(0, -\frac{1}{4}).$$

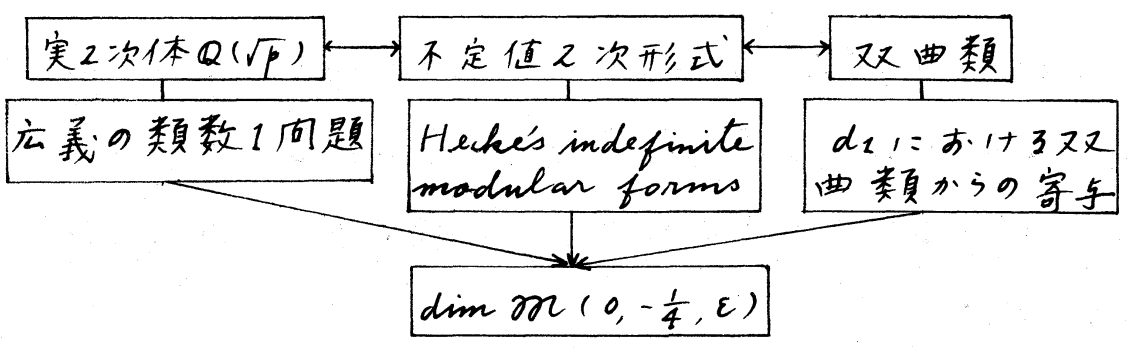
ここで, $\{M\}$ は Γ の楕円類をわたり, $\Gamma(M)$ は Γ 内の M に関する centralizer を, また $M = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$, $0 < \theta < 2\pi$ とするとき, $\zeta = e^{i\theta}$ とする. 更に, Laplacian

$$\Delta = y^2 \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right)$$

に関する $L^2(\Gamma \backslash S^+)$ (S^+ : 複素上半平面) 上の eigenvalue $-\frac{1}{4}$ の固有空間を $\mathcal{H}(0, -\frac{1}{4})$ で表す. この d_2 項は双曲類からの寄与で, $-\Delta$ の first eigenvalue λ_1 と深く関係する. Γ が数論的ならば, $\lambda_1 \geq \frac{1}{4}$ であろうと予想されている.

(II) Γ : non-uniform lattice のとき.

p を, $p \equiv 3 \pmod{4}$ なる素数とし, $\Gamma = \Gamma_0(p)$, $\varepsilon = \left(\frac{*}{p}\right)$ とする. このときの d_2 は, (2) 式に Γ の cusps からの寄与が加わって得られる. そして下図のような図式の成立することが予想される (Hiramatsu [8], [9]).



§ 4. Langlands 予想との関連

4.1 K を代数体, $\theta \in K = \mathbb{Q}(\alpha)$ なる代数的整数, $f(x)$ ($\in \mathbb{Z}[x]$) と θ の \mathbb{Q} 上の最小多項式, d_K と K の判別式, $d_K(\theta)$ と θ の判別式とする. そのとき,

$$d_K(\theta) = m(\theta)^2 d_K$$

なる $m(\theta) \in \mathbb{Z}$ がある. この $m(\theta)$ は $f(x)$ のみに depend し, K には関係しない故,

$$\text{Spl}(K) = \text{Spl}(f) \cup \{p : \text{素数} \mid p \mid m(\theta), (p) \text{ は } K \text{ で完全分解}\}$$

と書く. そのとき,

$$\begin{aligned} \text{Spl}(K) &= \{p : \text{素数} \mid (p) \text{ は } K \text{ で完全分解}\} \\ &= \{p : \text{素数} \mid c_p = 1\}. \end{aligned}$$

ここで, c_p は p の Frobenius class を表す. さてそこで,

$$K \longrightarrow \text{Spl}(K)$$

なる写像を考へれば, これが *bijective* になる. 即ち, この $\text{Spl}(K)$ は良い相互法則としての条件をみたしている. 以下では, $GL(n)$ に関する Langlands 予想 (Langlands の相互法則) と我々の *higher reciprocity law* との関連について述べる.

4.2 F を代数体とし, v をその place, F_v を F の v での completion とする. そして, $A_F (= A)$ を F の アデー ル環 とし, $G_A = GL(n, A)$ とおく. G_A 上の保型形式と

は, G_A 上の *slowly increasing left* $GL(n, F)$ -不変な関数で, 適当なコンパクト部分群で *right finite* なものと言ふ. $n=2$, $F=\mathbb{Q}$ のときにもう少しく詳しく云えば, G_A 上の関数 ϕ が次の条件(1)~(5)をみたすとき, ϕ を G_A 上の保型形式と言ふ:

$$(1) \quad \phi(\gamma g) = \phi(g) \text{ for all } \gamma \in GL(2, \mathbb{Q}).$$

$$(2) \quad \phi(gz) = \phi(zg) = \psi(z)\phi(g) \text{ for all } z \in \left\{ \begin{pmatrix} t & 0 \\ 0 & t \end{pmatrix} \mid t \in A^\times \right\}.$$

ここで, ψ は $\mathbb{Q}^\times \setminus A^\times$ 上のユニタリ-指標とする.

$$(3) \quad K_p \text{ は}$$

$$K_p = \begin{cases} GL(2, \mathcal{O}_p), & p \neq \infty \quad (\mathcal{O}_p: \mathbb{Q}_p \text{ の整数環}) \\ O(2, \mathbb{R}), & p = \infty \end{cases}$$

とし, $K = \prod_p K_p$ とおく. そのとき, ϕ は *right K-finite*: K の元による ϕ の *right translate* により張られる空間は有限次元である.

(4) ϕ は *slowly increasing*, i.e., 任意な正数 c と G_A の任意なコンパクト部分集合 ω に対し, 定数 C と N があって

$$|\phi\left(\begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} g\right)| \leq C |a|^N \text{ for all } g \in \omega, a \in A^\times \text{ with } |a| > c$$

が成り立つ.

(5) $GL(2, \mathbb{R})$ の普遍展開環の中心を z とするとき, ϕ は $GL(2, \mathbb{R})$ の関数として *smooth*かつ z -finite である.

この上には、 ϕ が次の条件 (6) をみたすとき、 ϕ を *cuspidal* と
 言う：

$$(6) \int_{\mathbb{Q} \setminus \mathbb{A}} \phi\left(\begin{pmatrix} 1 & x \\ 0 & 1 \end{pmatrix} g\right) dx = 0 \text{ for almost every } g \in G_{\mathbb{A}}.$$

この ϕ はこれまでの *modular form* の核子長を与えるもので
 ある。

さて、 π を $G_{\mathbb{A}}$ の既約ユニタリ表現とし、これが $G_{\mathbb{A}}$
 上の保型形式 (または *cuspidal*) の空間内の右移動として
 実現できるとき、 π を $G_{\mathbb{A}}$ 上の保型表現 (または *cuspidal* 表
 現) と云う。 *cuspidal* 表現 π に対しては、次のような π_v
 が一意に決まる：

- 1° π_v : 既約 ;
- 2° π_v : almost every v に関して不分支 ;
- 3° $\pi = \bigotimes_v \pi_v$.

例之は、 $n=2$, $F=\mathbb{Q}$ とし、重さ k の *cusp form* と

$$f(\tau) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n e^{2\pi i n \tau}$$

とする。そして、 π が f によって生成されるとする： $\pi = \pi_f$ 。

そのとき、

$$\pi_f = \bigotimes_p \pi_p \longleftrightarrow T_p f = a_p f \text{ for all } p \quad (T_p: \text{Hecke 作用素})$$

$$\pi_p: \text{不分支} \longleftrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \pi_p \text{ is canonical に対応する半単純共役} \\ \text{類 } A_p = \begin{pmatrix} \alpha_p & 0 \\ 0 & \beta_p \end{pmatrix} \text{ で, } \det A_p = 1, \text{tr}(A_p) = p^{-\frac{k-1}{2}} a_p \end{array} \right\}$$

Langlands 予想. K を F 上のガロア拡大とし, そのガロア群を $G = \text{Gal}(K/F)$ とする. そして,

$$\sigma : G \longrightarrow \text{GL}(n, \mathbb{C})$$

なる n 次元ガロア表現 σ に対応する Artin の L -関数を $L(s; \sigma)$ で表す. そのとき, G_A の保型表現 $\pi(\sigma)$ が一意に存在して, $\pi(\sigma)$ に対して決まる L -関数 $L(s; \pi(\sigma))$ は $L(s; \sigma)$ と一致する. 更に, σ が既約で non-trivial なら, $\pi(\sigma)$ は *cuspidal* である (Gelbart [5]).

例 5. $n=2$, $F=\mathbb{Q}$, $K=\bar{\mathbb{Q}}$ とする. σ としては $\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ に複素共役なものをとる. そのとき, $\pi(\sigma)$ はもしあれば重さ 1 の *cuspidal form* に対応する. 一方, Deligne-Serre [4] は, 重さ 1 の *cuspidal form* に対し, 上のような 2 次元ガロア表現の存在することを示した. 従って, Langlands 予想を法として,

$$\{0\} \xleftrightarrow{1 \text{ 対 } 1} \{\text{重さ } 1 \text{ の } \text{cuspidal form}\}$$

を得る. $\text{Spl}(\ast)$ を決めるのに, 我々がまず, 重さ 1 の *cuspidal form* を使う理由もここにある.

4.3 $f(x)$ を *monic* で既約な整係数多項式とし, その \mathbb{Q} 上の最小分解体を K とする. そして,

$$\sigma : \text{Gal}(\bar{\mathbb{Q}}/\mathbb{Q}) \longrightarrow \text{GL}(n, \mathbb{C})$$

を n 次元ガロア表現とする. \mathbb{Q} 上の有限次ガロア拡大 K_0 が

あって, $\ker \sigma = \text{Gal}(\bar{\mathbb{Q}}/K_\sigma)$ となる. また, σ は

$$\text{Gal}(K_\sigma/\mathbb{Q}) \hookrightarrow \text{GL}(n, \mathbb{C})$$

なる埋め込みを induce する. 更に, $K = K_\sigma$ となるような表現 σ が存在する. K_σ で不分裂な p に対し, $C_p \in \text{Gal}(K_\sigma/\mathbb{Q})$ 内の Frobenius class とするとき,

$$\sigma(C_p) = \Phi_p(\sigma)$$

なる $\text{GL}(n, \mathbb{C})$ 内の半単純共役類が一意に存在する. 従って,

$$\text{Spl}(K) = \{p: \text{素数} \mid \Phi_p(\sigma) = 1\}.$$

このとき, Langlands 予想のもとで, 有限個の p を除き,

$$\Phi_p(\sigma) = A_p(\pi(\sigma)).$$

ここで, A_p は $\pi(\sigma)_p$ に対応する $\text{GL}(n, \mathbb{C})$ 内の半単純共役類を表わす. よって,

$$\text{Spl}(K) = \{p: \text{素数} \mid A_p(\pi(\sigma)) = 1\}.$$

従って, 問題は G_A の保型表現の問題に帰着されたことになる (Arthur [1]). ここで, $n=2$ としよう. そのとき, 重さ 1 の cusp form f_σ で,

$$\pi(\sigma) = \pi_{f_\sigma} = \bigotimes_p \pi_p.$$

そして, π_p が不分裂なことより, $\text{tr}(A_p(\pi_{f_\sigma})) = a_p$ となる. よって,

$$\text{Spl}(f) = \{p: \text{素数} \mid p \nmid \Delta_f, a_p = 2\}.$$

ここで, Δ_f は $f(x)$ の判別式を表わす. 従って, 我々の

これからの仕事は, a_p を p -番目の係数とするような重さ 1 の cusp form f_α を構成することにある.

例 6 (Hiramatsu-Mimura [11]). \mathfrak{z} を, $\mathfrak{z} \equiv -1 \pmod{8}$ なる素数, $K = \mathbb{Q}(\sqrt{\mathfrak{z}})$, h を K の類数, L を K 上の Hilbert 類体とし, その定義多項式を $\Phi(x)$ ($\in \mathbb{Z}[x]$) とする. K のイデアル類群が巡回群のもとで, $p \nmid \Delta_K$ なる素数 p に対し,

$$\#\{x \in \mathbb{F}_p \mid \Phi(x) = 0\} = \frac{h}{6} a(p)^2 + \frac{h}{6} a(p) - \frac{1}{2} \left(\frac{\mathfrak{z}}{p}\right) + \frac{1}{2}$$

なる $\Phi(x)$ に関する合同関係式を得る. ここで, $\left(\frac{\mathfrak{z}}{p}\right) = 1$, $a(p)$ は以下で与えられる $\Gamma_0(\mathfrak{z})$ に関する指標 $\left(\frac{\mathfrak{z}}{p}\right)$ をもつ重さ 1 の normalized cusp form $f(\tau)$ (\neq new form) の p -番目の Fourier 係数を表わす. この系として,

$$\text{Spl}(\Phi) = \{p: \text{素数} \mid p \nmid \Delta_K, a(p) = 2\}$$

を得る. さて, $f(\tau)$ は次のような cusp form である. $0 \leq i \leq h-1$ として, K 内のイデアル類 k_i (k_0 : 主類) に対応する二次形式を $Q_i(x, y)$ とする. $Q_i(x, y)$ による n の整数表現の個数を $A_i(n)$ とし,

$$\theta_i(\tau) = \frac{1}{2} \sum_{n=0}^{\infty} A_i(n) e^{2\pi i \sqrt{n} \tau} \quad (\text{Im } \tau > 0)$$

と置く. また, χ を K のイデアル類群上の指標 ($\neq 1$) とし, $A(n)$ を次で定義する:

$$A(n) = \frac{1}{2} \sum_{i=0}^{h-1} \chi(k_i) A_i(n).$$

さてそこで,

$$f(\tau) = \theta_0(\tau) - \theta_2(\tau);$$

$$F(\tau) = \sum_{i=0}^{h-1} \chi(k_i) \theta_i(\tau) = \sum_{n=1}^{\infty} A(n) e^{2\pi\sqrt{h}n\tau}$$

とあく. $f(\tau)$, $F(\tau)$ は共に, $\Gamma_0(2)$ に関する指標 $\left(\frac{2}{p}\right)$ をもつ重さ 1 の *cuspidal forms* で, 特に $F(\tau)$ は *normalized new form* である. $Spl(\chi)$ を表現するにはどちらを使っても同じである. しかし, $\chi(x)$ の合同関係式を表現するには $f(\tau)$ の Fourier 係数を使う方がより簡潔である.

例 7. Stark - Shintani の理論との関連で決まるある種の実 2 次体の場合にも, Hecke の重さ 1 の *indefinite modular forms* の Fourier 係数を使って, *higher reciprocity law* が得られる (Hecke [6], [7], Hiramatsu - Ishii - Mimura [12]).

References

- [1] J. Arthur; *Automorphic representations and number theory*, Proc. 1980 Seminar on Harmonic Analysis, CMS-AMS, 1981, pp. 3-51.
- [2] M. F. Atiyah; *Riemann surfaces and spin structures*,

- Ann. scient. Éc. Norm. Sup., 4^e série, t. 4 (1971), pp. 47-62.
- [3] P. Barrucand and H. Cohn ; Note on primes of type $x^2 + 32y^2$, class number, and residuacity, Crelle 238 (1969), pp. 67-70.
- [4] P. Deligne et J-P. Serre ; Formes modulaires de poids 1, Ann. scient. Éc. Norm. Sup., 4^e série, t. 7 (1974), pp. 507-530.
- [5] S. Gelbart ; Automorphic forms and Artin's conjecture, Lecture Notes in Math., No. 627 (1978), pp. 242-276.
- [6] E. Hecke ; Über einen neuen Zusammenhang zwischen elliptischen Modulfunktionen und indefiniten quadratischen Formen, Math. Werke, Vandenhoeck und Ruprecht, Göttingen, 1959, pp. 418-427.
- [7] E. Hecke ; Zur Theorie der elliptischen Modulfunktionen, Ibid., pp. 428-460.
- [8] T. Hiramatsu ; On some dimension formula for automorphic forms of weight one I, Nagoya Math. J. 85 (1982), pp. 213-221.
- [9] T. Hiramatsu ; On some dimension formula for

- automorphic forms of weight one II (preprint).
- [10] T. Hiramatsu and Y. Mimura ; On automorphic forms of weight one II, The Art invariant and $\text{do mod } 2$, Math. Seminar Notes, Kobe Univ. 9 (1981), pp. 259-267.
- [11] T. Hiramatsu and Y. Mimura ; The modular equation and modular forms of weight one, to appear.
- [12] T. Hiramatsu, N. Ishii and Y. Mimura ; On indefinite modular forms of weight one (preprint).
- [13] C. J. Moreno ; The higher reciprocity laws : an example, J. Number Theory 12 (1980), pp. 57-70.
- [14] V. G. Kac and D. H. Peterson ; Affine Lie algebras and Hecke modular forms, Bull. A.M.S. 3 (1980), pp. 1057-1061.
- [15] V. G. Kac and D. H. Peterson ; Infinite-dimensional Lie algebras, theta functions and modular forms, to appear in Adv. Math.
- [16] M. Koike ; Higher reciprocity law, modular forms of weight one and elliptic curves (preprint).
- [17] J-P. Serre ; Modular forms of weight one and

Galois representations, Proc. Symposium on Algebraic Number Field, Academic Press, London, 1977, pp. 193-268.

[18] T. Shintani; On certain ray class invariants of real quadratic fields, J. Math. Soc. Japan 30 (1978), pp. 139-167.

[19] J. B. Tunnell; A classical Diophantine problem and modular forms of weight $\frac{3}{2}$, Invent. Math. 72 (1983), pp. 323-334.